

平成25年度 第4回 経営協議会議事要録

日 時：平成25年11月15日（金）15時00分から16時30分

場 所：如水会館1階「コンファレンスルーム」

出席者：【委 員】山内学長

天野委員、北尾委員、大塚委員、中島委員、新井委員、木川委員、
大芝委員、落合委員、小川委員、町村委員、菅野委員、林委員

【陪席者】渡邊監事、二村監事、高橋副学長

議事に先立ち、学長より前回（平成25年度第3回）の議事要録について確認を行った。

審議事項1. 平成25年度給与改定について

人事課長より、平成25年度給与改定について、資料2に基づき説明があり、審議の結果、原案どおり承認された。

審議事項2. 国立大学法人一橋大学職員給与規定等の一部改正について

人事課長より、国立大学法人一橋大学職員給与規定等の一部改正について、資料3に基づき説明があり、審議の結果、原案どおり承認された。

審議事項3. 目的積立金の執行について

財務課長より、目的積立金の執行について、資料4に基づき説明があり、審議の結果、原案どおり承認された。

報告事項1. 平成24年度に係る業務の実績に関する評価の結果について

高橋副学長より、平成24年度に係る業務の実績に関する評価の結果について、資料5に基づき報告があった。

なお、審議の過程において、以下の質疑応答があった。

- この評価結果に基づいて、予算配分に影響は生じるものなのか。あるいは、活動状況を共有するために公表されるものなのか。
- 評価結果自体が、直ちに予算配分に反映されるものではないが、中期計画期間全体を通じた評価が行われるため、目標達成に向けてしっかり取り組む必要がある。

報告事項2. 平成24年度における経営協議会学外委員からの意見を踏まえた法人運営の改善について

山内学長より、平成24年度における経営協議会学外委員からの意見を踏まえた法人運営の改

善について、資料6に基づき報告があった。

報告事項3. 平成24事業年度財務諸表の承認について

小川理事・副学長より、平成24事業年財務諸表の承認について、資料7に基づき報告があった。

報告事項4. 一橋大学財務レポート2013について

財務課長及び渡邊監事より、一橋大学財務レポート2013について、資料8に基づき報告があった。

なお、審議の過程において、以下のような意見交換があった。

- このレポートの配布範囲と目的についてご教示願いたい。
- 教職員や本学関係者に配布し、本学の財務状況等に関して理解を深めていただくため、昨年度から作成・配布している。また大学の公式サイトに掲載し、一般の方も閲覧可能となっている。
- 他大学と比して財務状況がよい場合に、受験者数を増やすための方策につなげることはできないのか。施設や財務状況に関するPRは大学の基盤状況を示すものだと思う。
- 財務レポートを作成している国立大学が増えているが、各大学が固有にアピールするまでの分析や他大学との比較まではできていないのが現状である。
- 本学では、外部の格付機関の審査を受け、AAAに格付けされたことから、そのことを大学公式サイトに掲載している。この結果を見た保護者の方が、一橋大学は財政的に安全であるということになれば、受験者も増えるのではないかという思いはある。
- 損益計算書によると、一橋大学の今年度の利益の大半が一橋講堂に係る収入から得たものか。
- 一橋講堂の利用に係る利益は15百万円程度で、残りの100百万円は複数年契約の拡充等の契約の見直しによるものである。
- 一橋講堂の予約システムが古く使いにくい。サーバー等はメンテナンスしてもすぐに陳腐化するので、クラウド化するなど利便性を向上していただきたい。
- 現在、コンテンツの見直しなどを行っており、ユーザビリティの向上を目指している。
- 「一橋大学概要2013」について、国際化やグローバル化を前面に押し立てている割には、大学の変化の状況を読み取ることができない。大学が変化するダイナミズムをアピールする「大学概要」を作る必要があるのではないか。財務レポートも同様に、教育上の努力をこれだけしているが、グローバル化や国際化に向けて予算が足りないためご寄付をお願いしたいなど、冒頭に変化が分かるような内容があるとアピールできるのではないか。
- 学生の国際交流については詳しく記載しているが、学術交流の方は記載が少ない。外部資金等を活用した外国人教員や女性研究者の人数は、データで求められることも多く、概要に記載するようにしたい。
- 外国人留学生の獲得増のため、グローバルな広報活動等を展開しているのか。
- 留学生の受入・派遣ともに、マルチ・ネットワークの構築に取り組んでおり、これまでの学生交流協定に基づく派遣のほか、欧州、アジア太平洋地域等とネットワークを構築し、

カリキュラム調整を行った上で留学生を増やしたいと考えている。また、授業内容やタイトルも共通化する一方、その国に留学しなければ学べないというような必然性を持たせたカリキュラムを構築したいと考えている。

- 本学では、国内あるいは、ある地域内で大学間の教育環境、科目内容、評価方法等における認識を共通化し、さらにお互いの互換性を認められるようなマルチな取組であるチューニングを展開することとしている。このチューニングは大学間の差が大きく、他国の学位が認められなかったEUで取組が始まり、その後、「Tuning Africa」、「Tuning Russia」、「Tuning Latin America」、「Tuning USA」などと広がっている。日本ではあまり活動していないが、海外の学生を送り出すためには大変重要な取組である。本学では、欧州やアメリカ等で先進的に進めている方を招へいし、ワークショップ等を開催する一方で、学長自ら世界チューニング大会において招待講演も行っている。このような取組は、本学のみならず、文部科学省等の支援や国内の他大学とも連携する必要があると考えている。
- 平成24年度の全学部学生に関する留学生の割合は、東京工業大学が3.8%、東京大学が1.5%に対して、本学は5.0%となっている。特にアジアからの留学生が圧倒的に多い。例えば中国からの留学生は学部・大学院合わせて256名、韓国からの留学生は192名いる。特に韓国の留学生のうち126名が学部生で、1学年当たり30名程度在学しており、その大半が、奨学金を貰わない私費留学生である。

韓国からの留学生は、明らかに日本企業に就職するための留学であるため、就職活動支援も行っており、一橋大学に留学すれば日本で働くことが出来るということを示したい。